佳作

母の愛

山形県　米沢市立第二中学校三年　横山　瑠香

知らなかった。母がそんな努力をしていたなんて。そんなに苦しんでいたなんて。

「あなたが、まだ小学一年生だったときぐらいかな。ママね、がんだと誤診されたことがあったの。」

「えっ。」

夕食のとき、母にそう告白された。親戚の人が病気になったと聞き、その話の流れで告白されたのだ。詳しく聞けば、健康診断のときにがんの可能性が出てきて、一ヶ月後に再診することになったらしい。結局は誤診だったそうなのだが。再診までの一ヶ月間、母は焦燥感に駆られていたという。

「あなたも妹も、ちっちゃかったでしょ。まだ何も出来なかったし、それは当たり前のことだったんだけど。もし私がいなくなったら、二人を誰かに預けないといけなくなる。そう考えたとき、生活する上で必要最低限のことは学ばせなきゃいけないと思ったの。」

それで母は、あのときかなり厳しかったのか。体の洗い方、ドライヤーの仕方、歯磨きの仕方など、全部一人でできるように毎日教えこまれていた記憶がある。その頃は何も考えていなかったが、そのような思惑があって母はあの行動をとっていたのか。

苦しかっただろう。自分が大病にかかっているかもしれない。そんな恐怖に加えて、二人の娘たちを残していかなければならないかもしれないという不安も抱えていたのだから。しかも、生活の仕方について教える相手は、子供だ。聞き入れてくれないストレスや申し訳無さだってあったと思う。それを抱えながら、母は私と妹に厳しく接していたのだ。

「結局は誤診だったんだけどね。問題がなくて本当に良かった。」

私も心からそう思った。もし医者の誤診ではなかったらと思うと、ゾッとする。それと同時に、あのときの母の努力と苦しみは無駄にはならなかったのだなと思った。母が厳しく接してくれたおかげで、私と妹は人よりも早く、自立に向かって進むことができた。親戚の家へ泊まりに行ったときに褒められることが多くなり、小さい頃の私はそれを嬉しく感じていたのを覚えている。

母とこの話をした後、私は今までどれくらい母に支えられてきたのかを考えた。保育園や小学校での日々、中学校への入学、たくさんの思い出……。その全てに母は寄り添ってくれていた。働きながら二人の子供を育てるのは、大変だと思う。でも、母はいつも家族との時間を大切にしてくれる。「それぐらい深い愛情があるんだ」。そう気づいたとき、私の心がじんわりと温かくなったように感じた。

私はこれから、母に感謝の気持ちを持ち、それを態度で示していこうと思う。そして、母のような「強さ」と「優しさ」を持って、自分の愛する人のために一生懸命頑張ることができる人になりたいと思った。